



第20回一休とんち
大賞応募作集など



『就職難の時代に』 齊藤 想

「なに、就職が決まったと。それはおめでとう。大学を卒業しても就職先が決まらない時代だから、お父さんは心から心配していたんだぞ。

それで、どうだ。手堅い会社なのか？ 介護関係の会社か。それはいいことだ。これから高齢化社会に突入するから、きっと業績は伸びていくぞ。会社の成長に負けないように、健一もしっかりと成長するのだぞ。

ところで、健一はどのような仕事を担当するのか。独居老人と会話して寂しさを紛らわす仕事なのか。孤独死が話題になる時代だから、それはとても大切な仕事だな。何度も自宅に通って早く顔を覚えてもらうのだぞ。

なに？ 家にも行かないのか。一人暮らしの老人宅に電話を掛けるだけだと。それも時代の流れなのかもしれないなあ。電話口でオレオレと息子の代わりに語りかけ、孤独な心を十分に癒したところで料金を振り込ませると。おい、それってもしかして……。

(終わり)

『昔のケーキ』 齊藤 想

おやつの時間です。姉妹の目の前に、ケーキが二つ並びました。早速食べ始める姉に対して、妹はどこか不満そうです。

「ねえお姉さん。今のケーキより昔のケーキの方が美味しかったこと知ってる？」

「そんなことないわよ。ケーキ屋さんがさらに美味しくしようと日々努力しているから、昔より美味しくなっているはずよ」

ところが、妹は姉の説明に納得しません。

「それなら、なぜお父さんは昔の方が良かったと文句ばかり言うのよ」

「お父さんは甘い物が苦手でしょ？ そのような事を言うわけがないわよ」

「それはお姉さんが知らないだけよ。お父さんは新聞を読んでいるときもケーキの心配をするぐらい、ケーキが好きなんだから」

「本当に？」

「本当だってば！ だって、お父さんは難しい顔をしていつも呟いているじゃない。最近はケーキが悪い、ケーキが悪いって」

(終わり)

『人生は旅に似て』 齊藤 想

修学旅行の定番は奈良と京都です。

生徒たちには事前にしおりが配られ、先生から繰り返し説明を受けているので、旅程は完璧に把握しています。

バスに揺られて目的地につくと、先生の指示に従って駐車場で整列し、順番に寺を拝観します。修学旅行の日程は一分単位で決まっています。道が混雑して多少ずれることもありますが、先生が適宜調整し、最後はぴったりの時間で宿泊施設に到着です。

ホテルでも食事や風呂の時間が決まっています。就寝前の枕投げや布団の上でのダンスで先生たちを困らせることもありますが、先生が部屋にいれば、それでお終いです。

こうして留学旅行は無事に終了しました。

修学旅行から帰ってきた娘は、母に言いました。

「人生は旅に似ているというけど、すべて予定通りだったわ。人生って簡単ね」

(終わり)

『学校にて』 平渡 敏

「今度転校してきた一休って生徒だけだな。とんちが得意だとか言って、生意気で俺の言うことを聞かないんだよ」

「先生が無茶な命令ばかりするから……」

「そうかもしれんが、他の生徒は従っているんだから、奴にも従ってもらわねばならん」

「ひとつ焼きを入れてやりますか」

「おっ、それだ！」

先生は一休君を呼び出しました。

「おい、一休。焼かないのに焼きを入れるとはこれ如何に？」

「先生、『焼きを入れる』の語源は刀などを焼いて鍛えるというところにありますので、無理問答になっていません」

「ううっ……。ええい、そんなことはどうでもいいから早く答えろ」

「それは無茶問答ですね。それではお茶からヒントを頂いて。『火にかけていてもやかんと言うが如し』」

「……………」

(終わり)
